

研究計画の概要

ドイツの歴史学者ラインハルト・コゼレック（1923～2006年）は、19世紀という時代の特徴を「迅速化」という概念によってとらえている。ヨーロッパにおいて最初の「鉄道」が開通する（英国で1825年ストックトン＝ダーリントン間）のと時を同じくして「電信」システムが構築される（1844年）。こうして交通・通信技術の劇的な発展がもたらされるや、人々が経験する時間のテンポは飛躍的に加速したのだ。

では、それまで誰も体験したことのなかったスピードを実現した鉄道や電信、すなわち「迅速化」した現実を、フィクションはいかに取り込んだのか？ 次に、世紀末をまたいで鉄道のライバルとして普及しはじめた交通手段「自動車」は、鉄道によって生まれた人々の感性にどんな存在として映ったのだろうか？

19世紀後半から20世紀初頭という時代の文化史的コンテクストを整理しながら、交通・通信技術の発展が人々の感覚にどのような影響をおよぼしたのか、スペインのフィクション作品において探ろうと考えた。

この考察を勧める上で、当時のスペインの文化史的コンテクストとして留意すべき点が三つある。

第一に、スペインの各地方に根差した地方作家の台頭である。大多数の作品をカンタブリア地方を舞台に上梓したホセ・マリア・デ＝ペレーダ（1833～1906年）、同様にアンダルシーア地方を舞台にしたペドロ・アントニオ・デ＝アラルコン（1833～1891年）、ガリシア地方を舞台にしたエミリア・パルド＝バサン（1851～1921年）、そしてアストゥリアス地方を舞台にしたレオポルド・アラス《クラリン》（1852～1901年）。これらの19世紀スペインを代表する作家以外に、いわゆる二流と称される作家がスペインの各地方で活動し、地域独特の地方小説を展開していた。そして、彼らの活動を基盤に、地方への自治権付与を目標に掲げる「地域分離主義」の色彩を帯びた「地方主義」が各地で高揚していった。スペインの特徴は、植民地だった北アフリカ、キューバ、フィリピンにおける独立運動の激化とそれに対する長年にわたる出兵といった国外の状況とそれが重なったこと。つまり、国家としてのスペインは栄光の失墜＝衰退が疑いようのない状況にあった。結局、1898年の米西戦争の敗北がとどめの一撃となり、スペインの衰退は決定的なものとなる。このように下り坂を転がるように没落していくスペインの回復を目指そうとしたのが「再生主義（レヘネラシオニスモ）」と呼ばれる思想潮流である。この潮流と上記の地方主義が結びつき、地方からの「スペインの再生」という機運が盛り上がっていく。すなわち、こうしたスペインの文学的・地方的主義は、旧来の価値観に固執する伝統主義ではなく、新しい「科学的」な技術にひらかれた進歩主義の側面を兼ねそなえていたのだ。

留意すべき第二の点が、そういった地方作家たちが定期的に作品を掲載する場となり、彼らに収入をもたらす媒体となったのが新聞メディアであり、とくに各地方の県庁所在地の資本をもとに創設され、安定した地方購読者を獲得した地方紙の隆盛である。他のヨーロッパ諸国同様に、スペインで19世紀後半においてもっとも隆盛を誇った、換言するならば、もっ

とも脚光を浴びた文学ジャンルは「小説」だと言える。しかし、19世紀後半において小説が、周知のごとく、いきなり「書き下ろし」として刊行されることはまずなかった。まずは新聞に章毎に一年ほどにわたって連載されたのだ。こうして作家たちは、売れ行きを気にすることなく（自己出版といったリスクを負うことなく）かなり自由に、みずからの感性にもとづき執筆活動をおこない、掲載料を手にした。その後、好評を得られた作品だけが単行本化されたわけだ。

すなわち、第三の留意点は、当時の出版慣行としての「新聞連載」フィクションの普及である。そして、こうした新聞掲載という文脈を背景に、より小部の作品、短いページで完結する文学ジャンル、「短編 cuento」がより好まれるようになる。そして、ここで後世への遺産の点で問題が生じる。地方紙に掲載された短編は、その後、作家自身がアンソロジーを編まないかぎり単体として刊行されることはなかった。結果、上に挙げた国民的な作家であっても、ペレーダであれパルド＝バサンであれ、いまでも研究者が当時の新聞を渉猟した成果として彼らの「新作」が発見されつづけている。

主たる研究先

スペインの再生を志向した「地方作家／地方小説」、彼らの作品を掲載したメディア「地方新聞」、そうした媒体に相応しい文学ジャンルとしての「短編」をキーワードに、交通・通信技術の発展がフィクション作品にいかん反映されたのかを探るために最適な研究先の選定をすすめた。

まず、学生時代の留学先として慣れ親しみ、学会活動等で頻繁に足を運んでいた首都マドリッドと第二の大都市バルセロナという大都市は除外した。そしてまず第一に、イベリア半島北西部に位置するガリシア地方の港湾都市であり、ア・コルーニャ県の県都ア・コルーニャに位置する「王立ガリシア・アカデミー／エミリア・パルド＝バサン生家・博物館 (Real Academia Galega/ Casa-Museo Emilia Pardo Bazán)」を研究拠点の候補とした。この機関は、上に記したエミリア・パルド＝バサンの生家に、王立のガリシア語アカデミーと、パルド＝バサンの遺物と蔵書、関係書籍を所蔵・管理する研究拠点が併設されたもの。筆者は、本アカデミーにおいて、2017年7月2日、「Los Pazos de Ulloa traducida ao xapones」という題目で、パルド＝バサンの代表作『ウリョーアの館』の邦訳を刊行するまでに筆者が直面したさまざまな困難について、スペインの一般聴衆と専門家を前に講演したことがある。また、パルド＝バサンの没100周年を記念し本機関が主催した国際学会「Emilia Pardo Bazán 100 anos despois」（2021年10月25日～29日）においても、「エミリア・パルド＝バサンのフィクションにおける旅行手段：感性の変容」〈Los medios de viaje en la narrativa ficticia de Emilia Pardo Bazán: cambio de su sensibilidad〉というタイトルで発表し、この論考は本機関が発行する雑誌 (La Tribuna, 16号, 2022年) に掲載されている。そのため、キュレーターの責任者 (Julia Santiso) とともに懇意にしており、さまざまな書類のやりとりも確実にこなせる機関として研究先の第一候補としたのだった。ところが、在外研究に出る三ヶ月ほど前

にいきなり連絡があり、「王立ガリシア・アカデミー／エミリア・パルド＝バサン生家・博物館」が雨漏り対策のためリフォーム工事に入る、そのため期限未定で閉鎖される（現在も閉鎖中）ことを知ることになった。

研究活動

そのため急遽、上記の資料研究をすすめる主要な場として、各地方の「政府公図書館 (Bibliotecas Públicas del Estado)」をめぐる歩くことにした。これは、ほぼ各県都に政府が設置した、文化省所属の 53 の図書館からなるネットワークであり、その多くは 19 世紀前半に設立され、各地方の定期刊行物に関してはマドリードの国立図書館や大学図書館より量的にも質的にもすぐれた資料を有している機関である (<https://mapabpe.mcu.es/mapabpe.cmd?command=GetMapa>)。

結果、筆者が資料探索をおこなった主な図書館は以下のものとなる――

マラガ

Biblioteca Pública del Estado en Málaga - Biblioteca Provincial de Málaga
マラガ市立文書館 (Archivo Municipal de Málaga)

グラナダ

Biblioteca Pública del Estado en Granada - Biblioteca Provincial de Granada
新聞図書館 (Casa de los Tiros)

セビーリャ

Biblioteca Pública del Estado en Sevilla - Infanta Elena - Biblioteca Provincial de Sevilla
ドス・エルマーナス市営図書館 (Biblioteca Pública Municipal "Pedro Laín Entralgo" de Dos Hermanas)

コルドバ

Biblioteca Pública del Estado en Córdoba - Biblioteca Provincial de Córdoba

サンタンデール

Biblioteca Central de Cantabria / Biblioteca Pública del Estado en Santander

バリャドリー

Biblioteca de Castilla y León / Biblioteca Pública del Estado en Valladolid

サラゴサ

Biblioteca Pública del Estado en Zaragoza

ブルゴス

Biblioteca Pública del Estado en Burgos

サン・アグスティン公センター図書館 (Biblioteca del Centro Cívico «San Agustín»)

シウダ・レアル

Biblioteca Pública del Estado en Ciudad Real - Isabel Pérez Valera

ドン・キホーテ博物館／セルバンテス図書館 (Museo del Quijote - Biblioteca Cervantina)

中でも、思い出深い図書館をいくつか挙げるなら、一つはドス・エルマーナス市営図書館。ドス・エルマーナス駅の近くにある近代的な図書館だが、土日にも含め 365 日 24 時間開館しているという研究者にとってとても有り難い図書館であった。

また、コルドバの政府公図書館は、グアダルキビール河脇の教会施設を再利用した古い建物で、旧市街の観光客たちの喧騒のなかひっそりとたたずむ図書館に、大メスキータの横を歩いてかよった日々が思い出される。ちなみに、筆者の滞在中に当施設は閉館し、いまはコルドバ駅近くの近代的建物に移転している。



もっとも仕事はかどったのは、バリャドリーの政府公図書館 (写真)。

建物自体が、16 世紀初期に建造されたベナベンテ伯爵の宮殿を再利用したもので、朝靄が立ち込め、広場にそびえるヒマラヤスギの先端に巣くったコウノトリがくちばしを鳴らすなか仕事を進められたのは研究者として無上の喜び。まして研究者用の部屋が用意されており、そこでほぼ毎日、係の図書館司書と二人だけで過ごし、必要な資料は、所蔵しないものでもネットワークを使って何でも取寄せてくれた。

研究成果

以上のような図書館で、定期刊行物を閲覧していったわけだが、たとえば、大きな港の脇に位置するサンタンデール中央図書館では、当時この地で最大の購買数をほこった共和派の日刊紙「エル・カンタブリコ (El Cantábrico, 1895-1937)」や、保守派の日刊紙「ラ・アタラーヤ (La Atalaya, 1893-1927)」において、きわめて興味深い印刷物を見出すことができた (詳細は後に公開)。

しかし、インターネットや印刷物だけで研究を進めるリスクを筆者が身をもって知り、在外研究をはじめとする、リアルに現地足を運んで研究を進める重要さを実感したエピソード

ードを以下に記す。

コロナ禍で研究を進め、2022年、スペインの国民的作家ベニート・ペレス＝ガルドス(1843～1920年)の没100周年を記念して、大西洋に浮かぶカナリア諸島グラン・カナリア島ラス・パルマス市で同年6月20日から23日にかけて開催された国際学会(XII Congreso Internacional Galdosiano)で発表し、その後、論文集 CODA A UN CENTENARIO: GALDÓS: MIRADAS Y PERSPECTIVAS (『ガルドス没100周年へのコード：眼差しと視点』、2024年)に掲載された研究論文「Galdós, ¿pinonero en la «novela de ferrocarril» en España?» (「ガルドスはスペインにおける《鉄道小説》の先駆者か?」)に関して、自分が犯した大きなミスを発見したのだ。

本論考は、従来、スペインにおける鉄道文学(散文)の嚆矢とされてきたグスタボ・アドルホ＝ベッケル(1836～70年)の『僧房から』の「第一の書簡」(1864年)と、手書きの草稿として見つかったペレス＝ガルドスの『ロサリア』を比較検討し、それぞれの鉄道文学としての長所を列挙。その後、両作品の決定的な相違を顕在化させ、その相違が両作家の立つ審美的地平の違いに拠ることを明らかにし、もし『ロサリア』が当時刊行されていたなら、ペレス＝ガルドスがスペインにおける鉄道小説のパイオニアとなっていたことを主張したものである。

この論考の途中で筆者は、ベッケルが描いた鉄道旅の非リアリズム性を明らかにする過程で次のように記している(原文はスペイン語)――

1873年の時刻表に明らかのように[……]、ベッケルの時代、マドリードからトゥデーラへ鉄道で旅するためには、乗換えが不可欠だった。(865ページ)

MADRID A ZARAGOZA.									
Servicio desde 20 de Junio de 1871.									
Kilómetros.	PRECIOS con el 10 por 100.			ESTACIONES.	42 MIXTO. Todas clases.	44 MIXTO. Todas clases.	48 MISTO. Todas clases.	CORREGO	
	1.ª cl.	2.ª cl.	3.ª cl.					1.ª y 2.ª	á Calata.
	Rs. cs.	Rs. cs.	Rs. cs.					M.	N.
7	5 56	2 60	1 60	MADRID.....	7 5	11	4 35	8	23
14	5 28	4 09	2 51	Vallecas.....	7 29	11 16	4 51	8	58
19	9 12	7 07	4 35	Vicálvaro.....	7 54	11 27	5 2	8	47
23	11 04	8 56	5 24	San Fernando.....	7 49	11 43	5 18	8	59
34	16 32	12 65	7 75	Alcalá.....	8 01	11 56	5 51	9	9
46	22 08	17 11	10 49	Azuqueca.....	8 26	12 23	5 58	9	28
57	27 56	21 20	13 00	Guadalajara.....	8 50	12 48	6 24	9	46
66	31 08	24 55	15 05	Pontanar.....	9 25	1 10	6 43	10	10
69	35 12	28 67	17 15	Yunquera.....	9 41	T.	N.	10	24
79	37 52	29 59	18 01	Humánes.....	10 17	»	»	10	32
92	44 16	34 22	20 58	Espinososa.....	10 45	»	»	11	8
105	50 40	39 06	25 54	Jadraque.....	11 15	»	»	11	46
116	55 68	43 15	28 45	Matillas.....	11 59	»	»	11	59
125	59 04	45 76	28 01	Baides.....	12 01	»	»	12	35
140	67 20	52 03	31 32	Sigüenza.....	12 54	»	»	12	52
146	70 08	51 54	35 29	Alicunza.....	1 15	»	»	12	52
165	79 08	61 75	37 85	Medinaceli.....	2 40	»	»	1	29
182	87 56	67 70	41 36	Arcos.....	2 45	»	»	2	6
205	98 40	75 26	46 74	Ariza.....	3 24	»	»	2	38
214	102 72	79 61	48 79	Cetina.....	3 42	»	»	2	52
219	105 12	81 47	49 55	Albama.....	3 59	»	»	3	13
224	107 52	85 55	51 07	Bublerca.....	4 12	»	»	3	27
232	111 56	86 50	52 90	Ateca.....	4 29	»	»	3	37
238	114 24	88 54	54 26	Terrer.....	4 44	»	»	4	14
245	117 60	91 14	55 86	Calatayud.....	5 12	»	»	4	24
258	125 84	98 38	60 82	Paracuellos.....	5 38	»	»	4	55
264	126 72	98 21	60 49	Mores.....	5 52	»	»	4	4
275	151 04	101 56	62 24	Morata.....	6 11	»	»	4	55
281	154 88	101 55	64 07	Ricla.....	6 35	»	»	4	56
286	157 28	105 59	65 24	Calatorao.....	6 45	»	»	5	5
291	159 68	108 25	66 55	Salillas.....	6 59	»	»	5	16
296	142 08	110 41	67 49	Epila.....	7 12	»	»	5	26
300	144 00	111 60	68 40	Rueda.....	7 25	»	»	5	54
307	117 56	114 20	70 00	Plasencia.....	7 58	»	»	6	4
345	154 20	117 48	74 82	Grisen.....	7 59	»	»	6	4
328	157 44	122 02	74 78	Casetas.....	8 25	»	»	6	90
341	163 68	126 85	77 75	ZARAGOZA.....	8 45	»	»	6	50

LINEA DE ZARAGOZA A PAMPLONA.									
ZARAGOZA A ALSASUA.									
Servicio desde el 15 de Noviembre de 1874.									
Kilóm.	Precios con el 10 por 100.			ESTACIONES	TREN 21 Omib.	25 mixto.	25 mixto todas cl.	25 mixto todas cl.	N.
	1.ª cl.	2.ª cl.	3.ª cl.						
	Rs. cs.	Rs. cs.	Rs. cs.						
44	7 80	5 80	5 60	ZARAGOZA.	»	»	»	»	»
49	10 20	7 60	4 60	Las Casetas.	6 33	4 16	»	»	»
23	12 9	9 5 40	5 40	La Joyosa.....	6 43	4 28	»	»	»
31	16 40	12 40	7 40	Alagon.....	6 52	4 39	»	»	»
36	18 40	13 80	8 20	Pedrola.....	7 10	4 57	»	»	»
44	22 20	16 60	10 20	Luceni.....	7 24	5 12	»	»	»
53	27 20	20 20	12 20	Gallur.....	7 37	5 35	»	»	»
69	32 80	24 60	14 80	Cortes.....	7 56	5 55	»	»	»
76	37 60	28 20	17 80	Elvaforada.....	8 14	6 19	»	»	»
92	45 20	34 20	20 40	Tudela.....	8 37	6 42	»	»	»
101	49 60	37 20	22 40	Castejon (F.)	9 50	7 12	»	»	»
103	51 40	38 60	23 20	Milagro.....	9 47	»	»	»	»
111	54 80	41 20	24 80	Villafra.....	9 56	»	»	»	»
119	58 60	44 20	26 40	Marcilla.....	10 9	»	»	»	»
132	64 40	48 40	29 20	Caparrosa.....	10 22	»	»	»	»
156	68 80	50 20	30 20	Oñate.....	10 42	»	»	»	»
145	71 20	53 40	32 20	Tafalla.....	10 57	»	»	»	»
158	76 80	57 60	34 60	Garinain.....	11 14	»	»	»	»
167	81 20	61 56 00	36 00	Burrutin.....	11 42	»	»	»	»
179	87 40	65 60	39 40	Noain.....	11 56	»	»	»	»
189	91 80	68 80	41 40	PAMPLONA.	12 18	»	»	»	»
201	97 60	73 50	44 40	Zuasti.....	12 59	»	»	»	»
215	103 20	77 40	46 70	Iruzun.....	1 56	»	»	»	»
221	107 60	80 80	48 40	Huarte-arauz.....	2 5	»	»	»	»
231	112	84	50 40	Echarriaranaz.....	3 21	»	»	»	»
				Alsasua...(F.)	2 40	»	»	»	»

マドリード駅で8時25分発の夜行列車に乗った旅客は、翌朝の6時50分にサラゴサ駅に着く。その旅客は6時発のトゥデーラに向かう列車に乗らなければならない……だが、サラゴサ駅では乗換えが間に合わない。結果、午後まで待って、3時46分発の列車に乗り、トゥデーラには夕刻6時42分に到着することになる。(865ページ)

当時の時刻表 (Indicador oficial de los caminos de hierro, Madrid: Imp. de J. García, 1873) をもとに考察を展開したわけだが、この記述には危うい誤謬が含まれている。

19世紀後半、鉄道萌芽期のスペインでは、各路線を無数の、まったく別の株式会社が敷設・運営していた。1865年に全線開通したマドリードーサラゴサ間を運営していたのは、1856年設立の La Compañía de los ferrocarriles de Madrid a Zaragoza y a Alicante (通称 MZA)。トゥデーラを通る、1861年開通のサラゴサーパンプローナ間を運営していたのは、1859年設立の la Compañía del Ferrocarril de Zaragoza a Pamplona という別の会社。当時時刻表 (Indicador, p. 17, p. 23) には、ご覧のように駅名として「ZARAGOZA」とだけ記載されている。そのため筆者は、上記の引用において分かるように、なにの疑いもなく、同じ駅、「サラゴサ駅」に到着し、そこから発車するものと考えていた。

ところが、営業していた会社が異なる結果、ベッケルの時代、マドリードからの列車は、通称「サラゴサ駅」ではあるが、厳密には「Estación de Campo Sepulcro」(後に、「El Portillo」と呼ばれる、写真) に到着。パンプローナに向かう列車は「Estación del Norte」から出ているのだ。両駅ともサラゴサ市内に位置するが、前者は、市中を横切る大河、エブロ川の南側、市の中心地区 San José に、後者の駅は、川を渡ったいわゆる郊外、アラバル地区にあった。要するに、マドリードからトゥデーラへ鉄道で向かうには、乗換えのためサラゴサ市内を3キロほどの、徒歩で40分以上かかる道程を、当時は馬車で移動しなければならなかった。



どうやってこの事象に筆者が気付いたのか？ 単に、借りていたアパートの近くで犬を散歩させただけ。その際、駅舎らしき外観の、今は文化センターの建物(写真)が目につき、学生時代にサラゴサを訪れたときの駅 (El Portillo) とはまったく違う場所に別の駅があることに気づいた。そしてパリやマドリード同様に、路線によって発着駅が違った時代がサラゴサ市にもあったのでは、と疑ったわけである。

在外研究の成果として、以上の資料研究に並行して、スペイン初の自然主義小説として評

価値の高いペレス＝ガルドスの『身分を剥奪された娘 (La desheredada)』(1881年)の翻訳をすすめた。舞台となる首都マドリッド、その南方の郊外に鉄道が敷設され、駅舎や車両基地が建設されることによってどんな光景の地区が出現したのか、という観点からきわめて興味深い作品の初邦訳を、邦題『スカートをはいたドン・キホーテ』として、膨大な註と大部の作品解題をともなう2025年度中に幻戯書房、ルリユール叢書の一巻として公刊予定(ただいま三校中)である。

また、在外研究末期に資料研究と並行して進めた、ノーベル賞作家マリオ・バルガス＝リョサ(1936年～)が2022年に上梓した作品論集『ペレス＝ガルドスの穏やかなまなざし (La mirada quieta de Pérez Galdós)』(Barcelona: Alfaguara)の邦訳もまた、本年度中に水声社から刊行予定である。本作は、バルガス＝リョサが、コロナ禍による引き籠もりの十八ヵ月をかけガルドスのほぼ全著作(新聞記事以外の小説29作、戯曲24作、《国史挿話》46作)を読破し執筆した作品論集であり、ノーベル賞作家が見出したペレス＝ガルドスの現代性を証するものと言える。

今後の展望

上記の図書館で収集してきた膨大な定期刊行物のPDF資料を分析することによって、19世紀後半から20世紀初頭において、(首都や大都市だけではなく、地方の住人も含めた総体的な)スペインの人びとが、いかに迅速化した現実をフィクションに取り込んでいったかを顕在化していこうと思う。

教育への効果

在外研究の2年間、スペイン南部の町々(Colmenar, Málaga, Dílar, Granada, Dos Hermanas, Córdoba)にはじまり、北部の町々(Santander, Valladolid, Burgos)、東部の町(Zaragoza)、中央部の町(Ciudad Real)といった数々の場所に居をかまえ、研究のあいまには市場へ買い出しに出かけ、近郊へ散策にくり出した。こうした場所で日々耳にし、とくには格闘した、地方ごとに異なる発音とイントネーションのスペイン語、現代におけるこうしたスペイン語の多様性を、担当する語学科目「スペイン語」の授業で学生たちに伝えていきたい。

また、担当する講義科目「スペイン語圏の文化」や「スペイン文化論」においては、実際に居住することでしか知りえない、スペインの生の実態——人種的多様性、政治的な保革の激しい対立、司法によるローフェア"lawfare"の問題、地方の自己決定権、急速に進む過疎化や温暖化の影響など——と、文化的な蓄積——先史時代の豊饒さ、モサラベやムデーハルといった融合文化の豊かさなど——について履修者に訴えていこうと考えている。